



「下村満子の生き方塾」

ニュース Vol.05 2016.09



入塾説明会で決意も新たに

「下村満子の生き方塾」7月勉強会は7月30日、福島県二本松市の福島県男女共生センターで開かれました。午前中は入塾説明会が行われ、7月10日投開票の鹿児島県知事選で当選した三反園訓鹿児島県知事が3年前、下村塾長に「生き方塾」についてインタビューしたテレビ番組のDVDを上映しました。三反園さんは塾長の親友かつ応援団でもあり、「生き方塾」で日本の政治について応援団講義を講演してもらったこともあります。DVD上映に引き続いて「生き方塾」は、「人は何のために生きるのか」、「命とは何か」といった極めてダサイことを学ぶ塾であり、入塾資格は人間であること、15歳以上であることなどと、下村塾長は「生き方塾」の基本的な考え方、あり方について説明しました。塾長が一番訴えたかったことは、「知的レベルと心のレベルは違う」ということです。事前告知が不十分だったこともあり、出席した入塾希望者は少数でしたが、「塾生五訓」を唱和するなど、塾生は原点に戻って決意を新たにしました。

午後からはNHKスペシャル「人工知能は芸術の分野にまで進出した」と、「と姉ちゃん」で編集長を演じている花山（花森安治）が描いた絵画を紹介している「日曜美術館」のDVDを流しました。人工知能が作る芸術?と、いかにも人間臭い花森さんの世界を見比べ、塾長が芸術とは何かについて、講話をしました。

塾長講話に引き続いて、佐々木慶子塾生が「自分を語る」を行い、憲法問題に通じている元朝日新聞編集委員で桜美林大教授の早野透さんが「憲法の危機と戦後保守——吉田茂が安倍晋三まで」と題して応援団講義をしました。夜遊び学は霞が城前の「かすみ」で、早野先生を交えて行い、間もなく本格的に動き出す憲法改正について意見を交わしました。【文責・皆川猛】

塾長講話

●「生き方」を学ぶのに適齢期はない

下村塾長の講話、上映したDVD、塾生とのやり取りなどを、以下のように要約しました。

「人は何のために生きるのか、いのちとは何か、なぜ他人を殺してはいけないのか」などといったことを塾生の皆さんには、手を変え、品を変え何十回も言ってきました。それは「生き方」を学ぶのに適齢期はないと思うからです。なぜなら、各年代によって悩みは違ってくるし、私自身も年相応の悩みや困難を抱え、生き方については毎日悩み、塾生の皆さんと共に学んでいます。そして、今は何があっても、何が起きても不思議でない難しい時代、世界だからこそ、時代を担う若い人には、「人間として正しいことは何か」を価値判断の基準とする生き方を学んでほしいと思っています。だから今期は、若い人が入塾するのを待つのではなく、こちらから学校に向き、「出前塾」と称して、「生き方」についてなるべく分かりやすく話をしたいのです。その第一弾として、会津若松のザベリオ学園で7月7日、「出前塾」を行い、この模様はニューズレターVol.4で紹介してあります。さらに不登校の子どもたちが学ぶ福島市の有朋学園で9月30日に「出前塾」をやりたいと校長先生から頼まれました。この校長先生は、環境になじめず引きこもってしまった子どもたちに、高校の教育をきちんと受けさせようと、情熱的に頑張っています。その姿を見て、私は「出前塾」を引き受けることにしました。

ところで昨日(7月29日)付けの朝日新聞で一番面白かったのは、応援団で3年程前、ちょうど参院選公示2週間前に講義してくれた元テレビ朝日政治記者の三反園訓さんが、鹿児



島県知事として川内原発に対して一時停止を申し入れるという記事でした。原発をなくすことを条件に、私は三反園さんの知事選に対して、鹿児島出身の稲盛さんをはじめいろんな方に支援をお願いしてきましたから、痛快な気持ちでした。彼には大きな支援組織はなく、しかも現職は4期目を目指した選挙ですから、誰も三反園さんが勝つとは思っていませんでした。しかし、大差で当選しました。28日が知事就任日ですから、その初日に原発一時停止を要請するという選挙公約を守ったこととなります。知事に原発を停める権限はありませんが、立地県の知事が停止を要請したら、無視できる性格のものではありませんから、国、九電の対応は目を離せません。

私がずっと以前取り組んでいた従軍慰安婦問題も、1面トップで扱われています。慰安婦問題を解決すべく10数年もアジア女性基金に関わっていましたが、今度は韓国内に設けられた元慰安婦救済の基金に日本政府が10億円を出損したという記事です。挺対協という慰安婦問題に対し、日本に徹底抗戦している政治目的の団体がいます。韓国内でどうという展開になるのか、注視したいと思いますが、アジア女性

基金が果たした役割も再評価されるのではないのでしょうか。

慰安婦問題に関連して、朝日の慰安婦報道によって日本の国際的な立場が低くなった、朝日は損害を賠償せよという訴訟は、渡部昇一ら右翼を中心とする原告が敗訴となった、という小さな記事がありました。確かに朝日は、今振り返れば慰安婦問題の報道について腰が引けていた。誤りは率直に認めた上で、慰安婦の存在については、毅然として「事実である」とはっきり主張すべきだった。それが、あいまいな報道でごまかしたから、右翼の報道機関へのバッシングが激増し、抗しきれなくなったメディア側は自主規制というか、大胆な報道をしなくなり、委縮していった、というのが現実です。政府のやり方を批判すると、ニュースが取れなくなるから、報道機関の自主規制は拡大し、続けているのが現状です。

今日はガラリと変わって、NHKのクローズアップ現代が取り上げた人工知能について、考えていることを話します。3月の勉強会の時に、コンピューターが囲碁の世界一棋士を破った、というニュースが流れ、「どう思いますか」と質問がありました。逆に私は「それってそんなに大騒ぎすることなの?」と返事しました。しかし、最近では、人工頭脳の方が人間より勝っているという主張を、コンピューターを生業としている人たちが盛んにあおっています。

でも、私が常日頃口にしている、「人間とは何なのか」、「いのちとは何なのか」という観点からすれば、人工頭脳の方が

●入力される情報頼りの人工知能

DVD NHKスペシャル 「芸術「創作」が変わる!? 人間と人工知能のコラボ」

ゲスト 川上量生さん(メディア企業会長)、山田五郎さん(タレント・美術評論家)

ついに、人工知能が芸術を生み出し始めました。美術評論家の山田五郎さん、いかがですか?

山田 確かに形にはなっていますけども、それが本当に生み出したと言えるのかどうか…。

芸術になるのかどうかということですね。そして、数々のコンテンツを世に送り出し、人工知能研究所を設立した川上量生さんです。川上さんは、この人工知能の芸術、どうご覧になりますか?

川上 芸術というと、理屈では説明できない感性の世界のことで、理屈で説明できないから難しいと思われていたのですが、実は簡単だったというのが分かってきたんじゃないかと…。

最近、話題になったのが、こちらの1枚。レンブラントから筆遣いを学んだ人工知能が作り出したものです。山田さん、美術評論家の目から見てもいかがでしょうか?

山田 見事な贋作ですね。でも遠目に、こうやってモニターで見ている分には、これが、レンブラントだと言われても分かりません。ただレンブラントは贋作が多いから、我々は疑いの目で見ますから、ちょっと襟の辺りの表現が違うかな、みたいな箇所はあります。

レンブラントは、17世紀オランダの巨匠です。傑作の「夜

人間より勝っているという主張に対しては、言いたいことが沢山ありますが、それはクローズアップ現代のDVDを見てから、皆さんと一緒に考えたいと思います。

私のバックボーンである仏教的な考えでは、人間は皆、「衆生本来仏なり」であり、凡人であっても仏の本質を持っている。つまり完全無欠な存在なのです。しかし、現実の生活では発展途上にあつて、欠陥がまだ多いから、本来の姿である仏とのギャップが原因で、悩みを感じているのです。坐禅は人間が生まれつき持っている仏の本質、完全無欠な存在であることを悟ることによって、全ての悩み、心配から脱却できる一つの手段なのです。仏教はこのように性善説に立っています。

近頃は、人工知能を持ったロボットの進化がめざましく、おしゃべりしたり、人間のような動作もできます。すごいことかもしれませんが、ロボットは所詮、人間が作り上げたものです。これから流す「クローズアップ現代」は、2人の専門家が、「人工知能は芸術の分野にまで進出した」というテーマで議論しています。まずそれをみてもらい、その後には、コンピューターとは対極の世界にある「とと姉ちゃん」に出てくる編集長・花山(花森安治)が描いた絵画を紹介しているテレビ番組「日曜美術館」の一部を流します。花森さんのいかにも人間臭い作品と、人工知能の芸術。見比べることによって、色々な議論ができると思います。



警」は、真ん中の人物が浮き立つように描かれています。彼は光の効果を生かし、絵画に革新をもたらしました。

1年半前、その偉大な天才の技を人工知能に学ばせるプロジェクトがスタート。300を超えるレンブラントの作品を、塗り重ねた絵の具の厚さに至るまでスキャンしました。分析には「ディープラーニング」と呼ばれる、画期的な方法が使われました。膨大なデータから、レンブラントの絵画に共通する特徴を人工知能が自ら見つけ出していきます。そして、人間が性別や年齢、服装など、9つの条件を与えます。すると人工知能は、学び取った特徴をもとに、条件を満たす肖像画を作成。3Dプリンターを使って出力しました。こうして、レンブラントの画風を受け継ぐ、全くの新作が生まれたのです。

さらに、人工知能は今、小説を書くといった創作の分野にも進出しようとしています。

今年(2016年)3月、人工知能が書いた小説が、ある文学賞の一次選考を通過し話題となりました。小説を書く人工知

能を開発したのは、公立はこだて未来大学を中心としたプロジェクトチームです。リーダーの松原仁さんは、人工知能学会の会長も務める第一人者で、公立はこだて未来大学で教授を務めています。

松原さんたちが挑戦したのは、SF作家・星新一さんの名を冠した文学賞です。まず、松原さんたちのグループは、星さんの作品1000編以上を覚え込ませました。そして、文章の長さや、よく使われる語尾などを分析。3年がかりで、星さんらしい文章を作り出すプログラムの開発に成功しました。「いつ」「どこで」「誰が」など、60ほどの設定を人間が与えれば、人工知能が文章を自動で作ります。松原さんは、現状はまだ人間の手助けが必要で、レベルを上げていくのはこれからだと考えています。「今は人間8割、人工知能2割と言っていますが、一瞬のうちにそれがひっくり返って、人工知能8割、人間2割になる可能性はある」

星新一賞の審査員も務めた、SF作家の東野司さん。将来の可能性について、こう語ります。「文章生成に関してはほとんど応募できるレベルにきている。それはちょっと驚きでした。人工知能が作家の仲間入りをすれば、小説家としての生活が危うくなるという危機感はもちろんありますが、むしろ新たなものが読めるのでは、と読み手としてはうれしいし、どんどん可能性が広がる感じがします」

芸術の世界に進出し始めた人工知能は、この先どのような影響をもたらすのか。芸術家たちの間に波紋が広がっています。

美術評論家の藤井雅実さんはこう言います。「下手な贋作者より、よほどレンブラントに忠実な作品。すごいと思いましたが、問題は人工知能自身が、主体性を持っていない点です」。

またある芸術家は「はっきりしていることは、芸術という言葉はもう安泰ではない。人間という言葉も安泰ではない」と言い切っています。

川上 僕は今まで、いろんなジャンルのクリエイターの人とつきあってきたんですけども、お話を伺っていると、みんな基本的には、過去の自分の経験や見てきた作品をもとにして、自分の作品を作られているんですね。そういう情報処理っていう事から考えると、当然それは機械もできるんだろうと思います。

——山田さんは、どう見た？

山田 今の絵を拝見していると、確かにすばらしいですよ。ただ、レンブラントにそっくりな絵。星新一さんが書きそうな小説。ラフマニノフっぽい音楽。これは創作と言えるのでしょうか。単なる模倣・贋作であって、創作ではないのではないだろうかという疑問の声もありますけどね。

——独創性が人工知能にはないのではということ？

川上 でも、人間もやっぱり贋作というか、作っていますよね。クリエイターも作っているんですけど、それを自制しているだけですよ。本当は、ちょっと油断しちゃうと作っちゃう。それを頑張って作らないようにしているだけなので、頑張って贋作を作らないようにするっていうのが、まだ人工知

能には、そういう回路が入ってないという。

——そもそも、創作、独創性というのは、どこから生まれるもの？

山田 僕ね、川上さんもおっしゃったように、VTRでも言っていましたけど、過去のいろんなものを学んで、そ

こから自分のものを作っていく、そこは同じだと思うんです。たぶん人工知能っていうのは、それをちゃんとやっちゃうんですよ。ちゃんと学んで、覚えちゃうんですよ。人はもうちょっと駄目だから、間違っ覚えてたりとか、あるいは情報もものすごい少なくて何も知らなかったりする訳です。逆に、その事が創作を生んでいるんじゃないかと思うんです。

——人工知能に小説を書かせるプロジェクトのリーダー、松原さんの考えでは、人工知能は、過去の作品から特徴を見つけ出して、組み合わせのパターンを変えて、さまざまな作品を作っている。人間も、過去の作品や人生経験などから、それをもとにして作り出しているの、仕組みとしては同じなのではないか。これをどう思う？

川上 少し違うんじゃないかと思っていて、どちらかという、大枠では、これは確かに正しいと思うんですけど、何か、あるジャンルの芸術で見た場合、映画や漫画って、最初は過去の作品、経験から作っていたと思うんですけど、だんだん過去の作品からだけ作ってきているように、だんだんそういうふうに進化してきているんだと思うんです。

——人間も、過去の作品だけで？

川上 人間も過去の作品だけでやってくるように。そうしないと売れないから、そうした方が売れるから。

山田 商業的な事を考えたら、だんだんそういう最大公約数的なところに集約していっちゃう。僕は逆に、さっきも言いましたが、人工知能はちゃんとやっちゃうけど、人間はちゃんとできない。例えば、東北の方の仏像は、京都から仏像の情報がちゃんと伝わってなかったりして、ものすごいびっくりするような仏像を作っちゃったりするんです。むしろ、これがちゃんとできない事が人間の創作の源泉。人工知能的に言えば、バグとか、情報の不足が、むしろ創作性の源になるんじゃないのかなという気がしますけど。

川上 人間は、やっぱり扱える情報量が決定的に少なすぎるんですよ。少ない情報量で模倣しようとするので、必ず失敗しちゃう。

山田 その失敗がオリジナリティーなんじゃないのかなというように思いますけどね。

——私、個人的には結構、感情があるかないかというのも大きいんじゃないかなと思うのですが。人間だと、いろんな人生経験で、いろんな感情をそこに持って、それが創作活動に



つながったりだとか、同じ過去の作品にしても、人間はただ一字一句読んでいくのではなくて、そこに感動したりだとか、怒りを覚えたりだとか。そういった感情が蓄積されているから、情報としてインプットされているだけとは違うのではないかと思うが？

山田 感情のパラメーターをここ(過去の作品や情報)に入れる事はできないんですか？

川上 入ってしまうと思いますね。

——感情も組み込める？

川上 感情も組み込めます。過去の作品というのが、感情をもとに作られた作品である限りは、その感情の要素は、そこ(過去の作品や情報)にも入りますよね。ただ、そこから先もあると思っていて、作品がクリエイター側だけを学習していますよね。そうではなくて、人間側も学習できるはずなのですよ、作品を鑑賞する側。鑑賞側がどういうものに反応するのかを学習するのは、すなわち感情を学習するっていうのと同じだと思います。

——感情も学習できるとなると、よく言われるのが、人工知能が人間を超えるのかどうか。芸術の分野において、人工知能は人間を超えるられる？

山田 例えば、チェスの試合だったら、勝った負けたがありますよね。だけど、芸術の分野でどっちが優れているのかというのは何とも言えません。超えるも何も、超えたか超えないかを判断するのは誰なのかということです。

——判断がなかなかできない？

山田 できません。だから、超える超えないと言ってもしょうがない、意味がないんじゃないかという気はします。人工知能が作った作品の方がいいと思う人が出てくる。それはそれで、別に全然有り得る事だし、だからといって、人工知能が人間を超えたとも思わないです。

川上 たぶん、売れるものを作るっていうのは、人工知能は得意だと思います。いろんな人がいろんな作品にどう反応するのかというデータをこれから解析できるようになると思うんですよね。そうすると、どういう特徴を持った作品が、一番受けがいいのかというのは、ビッグデータから取れてしまうと思います。

山田 実際、アメリカでは、ドラマや映画をそういうふうにして作っています。

川上 人間もそういうふうにして作っていますから。

山田 商業的な成功で、勝ち負け、超える超えないを決めるとなったら、人工知能が超えますよね？

川上 と思います。

山田 そこは超えると思いますよ。だけど、それだけではないのが、この芸術とか創作とかという分野だから。

——今、音楽も人工知能を使って作曲する研究がかなり進んでいます。むしろ人工知能が作った音楽の方が心地よいという結果も出ています。

山田 人工知能を利用し作曲することは、普通にもう行われますよね？

川上 もうなりますね。なると思います。

共に作り上げていく？

山田 クリエーターが人工知能を使って、音楽だけじゃなく、いろんな美術だったり小説だったり作っていくっていうのが普通になりますよね。

川上 たぶん、ツールとして使われると思います。使っている、と言わなくても、使っていると、言っても、誰も分からないし。——言われないと分からない部分でもある？

山田 観客が、人工知能が作ったって聞くと急に評価が下がるみたいな。だから、さっきの話ですけども、超えた超えないの判断をするのは人間じゃない。その判断をする人間が非常にあやふやな。

川上 だから、人間の能力が低いんですよ。人工知能と人間との間に超える超えないの時に、例えば羽生さんを超えたのかとか、もしくはレンブラントを超えたのかっていうふうに、彼らは人間だと思っているんですけども、それは自分じゃないですよ。自分の能力ってすごく低い訳ですよ。そういう意味では、とっくに人間は負けている。

——人間の能力は低い？

山田 低いし、高いついてというのが、人間の能力の面白いところだと思うんです。今、見ている思ったんですけど、芸術っていう事で言う場合、例えば音楽だったら楽譜だけじゃなく、演奏がありますよね。音楽を作ったと言っていますが、実際、音を出しているのは人工知能じゃなくてスピーカーです。実際、どんな楽器、どんな音が出るか、そういう事によって善し悪しが決まってくる。絵画も、人工知能が描いたと言っていたけど、実際に描いたのはプリンターです。実際、この形にしていく技術やクオリティー、そういうものによって変わってきます。人工知能が出している答えは同じだけど、プリンターがよくなったら、もっとよくなるかもしれないとか、こういう問題はどうなんですか？

川上 もちろんそれもそうだと思いますけど。プリンター自身も、たぶん人間の筆みたいに、何かある種のランダムな要素とかを入れられるような時代も来ると思うので。

——そこも進化していく？

川上 人間並みにちょっとミスをしたりする人工知能っていうのも、開発する事は可能だと思います。

——視聴者の方より:「著作権はどうなるのでしょうか？」

国は、人工知能を開発した人に持たせるのか、人工知能を使った人に持たせるのかなど、制度を見直す検討を始めようとしています。著作権の問題は、将来どうなるのでしょうか？

川上 そうなると維持できないと思うんですよね。著作権に限らず、あらゆる知的財産権というのは今後、人工知能が作り始めたら、どうしようもないですよ。どれに権利を与えていいのか、なかなか難しいと思う。長期的には著作権は崩壊すると思います。

——視聴者の方より:「人間の創造性が衰えるのではないのでしょうか？」

山田 人間の創造性は衰えないと思います。僕はむしろ聴く側の、例えば耳とか目が衰える、そっちの方が怖いんです。だって、一番受け入れやすいものばかり人工知能が作っていく訳ですよ。そればかり見たり聴いたりしていると、それ以外のものが分からなくなるかもしれない、その方が怖いよ



うな気がします。

DVD NHK日曜美術館「**暮らし**」にかけた情熱～花森安治 30年間の表紙画

「と姉ちゃん」のモデル・大橋鎮子(しずこ)から「女性のための雑誌を作りたい」という相談を受けて編集長を引き受けたのが花森安治(1911～1978)です。広告を載せず、実名をあげて商品

を評価する「商品テスト」で知られる「暮らしの手帖」は、1948(昭和23)年9月に創刊されたライフ・スタイル誌です。

創刊号で花森はこう言っています。「美しいものは、いつの世でもお金や暇とは関係がない。磨かれた感覚と、毎日の暮らしへのしっかりした目と、そして絶えず努力する手だけが、一番美しいものを、いつも作り上げる」

戦後日本の出版界でひととき異彩を放った家庭雑誌『暮らしの手帖』。1948年の創刊から1978年まで、30年にもわ

たって編集長をつとめながら、装丁家、イラストレーター、コピーライター、ジャーナリストなど、多彩な活躍をしたのが花森安治です。編集長としてのこだわりは号数の数え方にも現れています。「100号ごとに初心に立ち返る」という意味から100号ごとに「第n世紀」と区分して出版回数を数えました。創刊～第2世紀53号(1948～1978年)の表紙153枚は花森安治が自ら描いた表紙絵で飾られました。

花森には苦い思い出があります。出版の腕を買われ大政翼賛会の広告宣伝に一役買ってしまったという過去です。戦後、花森は「暮らしの手帖」の仕事に取りかかります。そのとき花森のころを揺さぶったのは人々の暮らしに欠かせない日用品でした。戦後の復興を乗り越え、日本は高度成長の波に乗ります。

「生活者の視点」を編集の柱にすることを花森は変えませんでした。ところが鬼の編集者・花森を心筋梗塞の病が襲います。病室で花森はスケッチブックに自画像を描きながら、回復の時を待ちました。回復して編集室に戻った花森は表紙のモチーフを変えます。彼が描いたのは女性の絵でした。女性に象徴される生活者の視点は、世の中の動きをゆっくりと、だがしっかりと変えてゆく力になるのだと、編集者は確信していたに違いありません。

●芸術は魂の叫び

いかがでしたか。私がこのDVDをお見せしたのは、この言葉を聞いて、かみしめてもらいたかったからです。皆さんに一番聞いてほしかったのは、「美しいものは、いつの世でもお金や暇とは関係がない。磨かれた感覚と、毎日の暮らしへのしっかりした目と、そして絶えず努力する手だけが、一番美しいものを、いつも作り上げる」という花森の言葉です。

もちろん、私は、人工知能、人工頭脳、コンピューターといった文明の利器を否定する気はありません。ロボット・スタイルの電気器具は暮らしに入り込んで、生活を手助けしているし、慢性的な人手不足が悩みの種である介護現場ではロボットは、救世主であります。科学者たちはスーパーコンピューターを使って、人間なら一生はおろか、二生、三生かかっても処理できない計算を瞬時にして、いろいろな謎を解明したり、より便利な機器を開発しています。

先程、初めに見たDVDは、コンピューターが芸術の分野まで入ってきた、というのがテーマです。美術評論家の山田さんと業界の代表が、芸術とは何か、人間とは何かという深いところにまで議論していましたね。皆さんから意見をもらいましょう。

まず、理科系でしかも会社経営者である杉江副塾長から話をしてください。

【杉江副塾長】人工知能はあちこちで姿を見せ、将棋や囲碁といった勝負の世界では、人間に勝つことも決して珍しくありません。これは山田さんの意見に近いのですが、勝負の世界では勝ちと負けがはっきりするけれども、芸術や文学の世界では、どこに価値があるのかという評価基準が人によ

てまちまちです。ですから、人工知能が人間を超えるかと比較すること自体、意味がないことだと思うのです。人工知能が作った絵を、それでもいいよと言う人もいれば、いや絵描き本人が描いた絵でなければいけない、と言う人もいるはずですから、共存できると思います。人工知能によって人間の仕事がなくなるとは、私は決して思いません。

それとですね、小説の場合、今読んで感動した小説を、一年後に読んでもう一度感動するかというと、決してそうではないと思います。人間ですから感情があるせいです。繰り返しになりますが、人工知能が生み出したものに価値があると認めるならば、その対価を払えばいいのであって、やはり人間が創作したものでなければ、という人は人間が創作したものを買えばいいのです。人工知能と人間は共存できるのです。今、塾長がおっしゃたように、昔は動力も人力に頼っていましたが、やがて家畜の力を利用するようになり、その後の水車などの自然エネルギーを知り、産業革命からは、化石燃料を使った蒸気機関が登場して、人の代わりをしました。人工知能もこの延長線上にあると思えば、大騒ぎする必要はないのでは。決して人間の存在価値がなくなるとは思ってい



ません。

【下村】私が言いたいことを代弁してもらった気がします。人間と人工知能は共存できるはずですが、山田さんと対談した業界の人は、「人工知能が人間を超えた、超えないと議論している時、例えば、人工知能が将棋の王者羽生さんを超えたのかとか、もしくはレンブラントを超えたのかっていうふうに、議論しているけれども、こういう議論自体が人間の能力の限界を認めていることになる。そういう意味では、とっくに人間は負けている」と述べていましたが、この主張に私はとても腹が立つのです。他にも誰かいませんか。

【鉢村健塾生】人工知能が発達したり、機械が高度化すれば、人間にとって時間に余裕ができるわけで、その分人生を楽しめることになります。人間の知恵によって社会が豊かになっていくことだと思うのですが、人の汗、人の仕事がないものには、価値が認められないとしても、いいのではないかと。人が芸術で感動する、スポーツで感動するのは、そこに自分を置き換え、流した汗が尊いからであって、結果が先に分かっちゃってしまえば、人は何の努力もしないでしょう。

話が少しずれると思いますが、最近大流行の「ポケモンGO」です。調べてみると、あれも人工知能の技術であって、グーグル社が全ての情報、人の行動パターンまでも集約できるシステムです。その巨大な情報をお金で買えたら、巨大な権力がその情報を管理できるとしたら、私たちはどう対処できるのか。そろそろ考えないといけなと思います。

【一般出席者】今後知的財産権はどうなっていくのでしょうか。もう一つは、ものの価値です。ピカソが自分で描いた絵だから高いのは分かるけれども、その絵とそっくり寸分たがわず人工知能が描いた絵に価値はあるのかどうか。いったい、ものの価値はどうなっていくのか。予測が付きません。

【下村】ものの価値については、製造業をしていた杉江さんなら説明できるでしょう。

【杉江】人工知能が描いた小説や、人工知能が描いた絵画を、知的財産権がカバーできるものだと思います。感覚的には、著作権の対象にはならないと思います。しかし、知的財産権というのは、こういうところが新しい発明だ、などの規定がありますが、人工知能の産物はそれとは外れていると思います。レンブラントの絵は3Dで印刷したそうですが、3D印刷の技術そのものは、どこかが知的財産権を持っていますから、新しい3D印刷技術は知的財産権の対象になりますが、その技術によって出来上がったものが、新たな知的財産権を持つことはないと思うのです。全部既存のものですから。でも、既存のもの組み合わせであっても、新しい組み立て方であれば、知的財産権を持つと思います。新しいビジネスモデルという言葉は聞きますが、知的財産権は持っていますので、特許庁に行って相談すれば、感覚的には財産権はあると認定されるかもしれません。

【下村】こういった人工知能に伴う知的財産権の問題は、現在の法律では絶対に全てをカバーできません。だからどこかの時点で、法律を作らなければ対応できないと思うのですが、一般消費者に有利なのか、それとも企業側有利な法律になるのかは、時に政府の判断によって大きく違うと考えま

す。今の情報化社会で怖いのは、今、鉢村さんがおっしゃったように、無意識のうちに、私たちの情報が管理され、逆に情報を管理する側によって、行動を誘導されてしまう危険性があるということです。その恐ろしさは我々素人には分かりにくいのですが、ポケモンGOのようなゲームで遊んでいるうちに、いつの間にかマインドコントロールされてしまう。本当に怖いことです。

これは原爆の同じですよ。科学者は全くシンプルに新しい原理や技術、製品などを発明発見しますが、それをどう使うかで、人類にとって福音になったり、悪魔になります。原子の構造を解明し核分裂が生み出すエネルギーは、とてつもなく大きいことをアインシュタインらは予言し、この結果原爆が作られました。だからアインシュタインは後悔し、湯川秀樹さんと世界連邦の構想を打ち出し、世界平和を実現しようと思いました。真理を知りたいという科学者の純粋な動機が、いつの間にか怖い方向へねじ曲げられて、人類を不幸に陥れてしまう。人工知能もこういった轍を踏む可能性が大きいのです。

【元島】知的財産権はよく分かりませんが、先程のDVDを見て面白いと思ったことは、人工知能が作ったことを知らないで音楽を聞いた人たちが、その音楽をとってもいいと感じているのに、実はそれは人工知能が作ったのだよ、と聞かされると途端に冷めてしまう。人間が受ける感覚はそういったもので、実に頼りないわけですが、そういった判断をするのは人間の側でして、その時、脳はどんなふうに判断しているのかは非常に興味ある点です。そういう意味で、人間が感動するなど、心が大きく動いている時、何かと共鳴しているのです。ところがコンピューターが作ったものに対して、共鳴できるのかどうかは、今後の問題でしょう。例えば二つの音楽、一つは人間が作り、もう一つは人工知能が作ったものですが、それをコンピューターに聞かせ、どちらが人間が作ったものかと判定させたら、きっと面白いはずですよ。きっとコンピューターは人工知能が作ったものを、人間が作ったものと判定するでしょう。それは波動の共振という現象でありますから、本物が持つ波動をしっかり受け止めて、脳にきちんと覚えさせる。本物と数多く接していけば、本物とコピーを区分できる力が付くと思います。本物が持つ波動をいかに自分に取り込んでいくのかがカギを握っています。

【下村】私がDVDを見て一番気になったこと、一番頭にきたことは、人工知能を芸術と関連付けて話をしていることなのです。例えばレンブラントの絵を精密な写真で複製することは、昔からいろいろな方法でやっていることでして、写真の代わりに人工知能が模写したということです。人工知能が模写したものを、どうして芸術というのか、分かりません。人工知能がしたことは、限りなくレンブラントに近い模写でしかない。にもかかわらず、人工知能は芸術の分野でも人間を超えたのか、という問題提起自体がおかしいと思うのです。

山田さんと対話をしているうちに、ITの業界人からは、だんだん本音が出てきて、「そうした方が受けがいいから」、「売れるから」と何度も発言しました。そうすると、これは芸術の話ではなく、いわゆる一般の商品と同じレベルの話です。

芸術には作者の魂があって、思いがあって、生命があっ

て、情熱があって、人間性があって、さらにその時代背景があって、そこから創作が生まれます。芸術家は、決して売目的のために創作活動はしません。ピカソにしても、ゴッホにしても、初めは全く評価されずに、貧しい生活を送っていました。今ほどの高額で売買されるのは、後になってからです。芸術家とはそういうものです。業界人は、売れる、受けるの話になって化けに皮がはがれました。彼は「売れる」、「受ける」ものでなければ芸術ではない、と考えているのでは、と私は勘ぐってしまいます。要するに、音楽にしても、人間の気持ちを良くするメロディーやリズム、ハーモニーを上手に組み合わせれば、ヒーリングミュージックのような心地よい音楽ができます。でもそれは商品として売って利益をあげることを目的に作られるもので、芸術と呼ばない、別のカテゴリーに入るものです。商品です。芸術と評価される音楽は、ベートーベンにしても、モーツァルトにせよ、好きな人もいれば嫌いな人もいます。それは波動があるからです。前にも話しましたが、魂があって、思いがあって、生命があって、情熱があって、人間性がある、これらに突き動かされて作曲するのです。

売れる、売れないなんてことは、その時全く頭にないのです。売るための小説と、心の奥底から生まれる強い思いに揺さぶられて書く文学は全く異質であるのに、業界人はこの辺りがゴツチャになっているから、「売れるものが芸術」と錯覚しています。結局、人間というものを分かっていないのです。私の考えでは、芸術というものは、魂の本当の叫びであっ

て、大衆に受け入れられることを狙っての作品は、文学にしる、美術にしる、音楽にしる、芸術ではありません。芸術とは自己表現で、絵で表現したり、音楽で表現したり、文字で表現したり、肉体で表現したりと、表現方法は様々です。どの表現手段を取るかは、才能や個性で決まり、苦しみや喜び、感動や悲しみ、苦悩などをどう表現するか、みんな違います。それを売れる、売れないの尺度で測るのはおかしいと、私は思うのです。

人間の本质は太古から全く変わっていません。その証拠に太古からみんな読んでいた古典文学は、今読んで心をつつから、古典として残っています。だからある時代にだけ受けやがて消えていく作品を、私は否定しませんが、人間の本质を何らかの形で表現した作品は、時がいくら流れても受け入れられます。人工知能のように、新しいものをどんどん生み出すことはいいことだと思いますが、それを使うことによって、体も、頭も、感性も退化するのでは本末転倒ではないか。今はこういう時代に入っていますが、何事にも「いかに生きるか」「人間の本质は何か」という価値判断がさらに大切になっていると思います。原子構造の研究から原爆が生まれたように、価値判断を謝ると、どうにもならないのは火を見るより明らかです。だから時代の流れに右往左往しないで、何かがあったら原点に戻って、自分の足で立ち、自分の頭で考え、人間として正しいかどうかを基準にして決めていくことを忘れてはいけません。

早野透応援団講義

●「冷たい政治」対「情の政治」

早野先生は開口一番「それにしてもひどい世の中だ」と言い、相模原市の施設で起きた19人殺し、について「障害者は社会にとって無用だから、生きていく必要はない、と主張したヒトラーと同じ理由であることに驚いた」と話をし、日本を含めて全世界で暴力肯定の思想が広がっていることに懸念を示しました。そして戦後71年を迎えた日本はとても危ない気がすると語り、最大の護憲論者派である天皇が退位の意向を示していること、自民党の中では比較的リベラル派の谷垣幹事長が入院していること、ロッキード汚職で逮捕された元首相の田中角栄が今ブームになっていること、参院選で改憲勢力が3分の2を占めたことから、憲法改正の動きはいよいよ始まることなど、今の政治状況について触れました。早野先生の講義の骨子をまとめてみました。

①安倍政権にとって憲法改正は悲願であり、具体的な動きの第一歩となる国会両院での改憲勢力3分の2議席確保は、達成された。自民党の規約では安倍総裁の任期は2年だから、2年以内に改憲に向けた動きは本格的に始まるだろう。政治は複雑に絡み合っているから、一直線で改憲には進まないが、放っておくと心配な政治状況になる。



②参院選の結果をどう見るかだが、全国32で行った1人区の野党共闘は11勝となり、それなりの成果があったと思う。特にこの共闘では共産党の頑張りが目立った。これまで共産党は1人区には必ず候補を立てていたが、今回は共闘をリードして候補擁立をしなかった。不破元委員長が民進党候補の応援演説をするほど、野党共闘に本気であった。

③自民党は憲法改正を党是に掲げてはいるが、安倍さんが首相になるまでは、本気で憲法を改正しようとしたことはなかった。彼がなぜ憲法改正に前のめりなのか。きっとA級戦犯であった祖父岸信介の影響があるのだろう。

④吉田茂は憲法改正を時期尚早と考え、日本防衛をアメリカに肩代わりしてもらおう「軽武装・経済優先」のレールを敷い

て、ごく少数の首相を除き歴代首相はこれを踏襲した。つまり戦後保守の王道は「護憲」だった。岸信介の弟でタカ派と見られた佐藤栄作首相も「現憲法は国民の血となり肉となっている。平和憲法を守る」と言っていた。角栄さんは自民党総裁選の公約で、「憲法9条を対外政策の根幹とする」と不戦の誓いをした。

⑤自民党の特色は派閥があって、憲法解釈も派閥ごとに違いがあって、懐が深く、広がった。だから難しい問題もいろいろな立場、意見を集約し、妥当なところに落ち着いた。メディアは派閥をずいぶん批判していたが、今考えると、派閥はあれでなかなかいい仕組みだったと思う。ところが今は安倍さんだけの自民党になっているから、派閥時代のような懐の深さがなく、それが安倍さんの独りよがり的な政治を許している。

⑥憲法改正は安倍さんのライフワークで、改正によって「日本を取り戻す」という。9条を改めて、国防軍をつくり日本を「戦争のできる国」に仕立て上げるのが宿願。

⑦憲法改正の議論は、環境権など、聞こえの言い分を強調し、国民ガン?と思う部分については曖昧に行うし、公共の利益など一見もっともらしいことを言いながら、実は人権を制約する狙いを秘めている。気づいた時には遅かった、という

ような事態を招かないためにも、不断の監視が必要だろう。

⑧現在の田中角栄ブームは、ロッキード汚職によって田中角栄が逮捕され40年経ち、この節目に合わせ石原慎太郎が「田中角栄は天才」を出版したのがきっかけとなったが、その背景にあるのは安倍政治に対する国民の違和感が根強いことだと思う。安倍政治は、強者への思いやり政治であるから、これに対する反発として野党共闘が一定程度勝利した。

⑨7月26日夜、「田中角栄逮捕から40年」というシンポジウムが行われたが、角栄の大番頭であった小沢一郎は「角栄ら保守本流は、富の公平分配を目指した。メディアが安倍政権批判をせず、政府の『言う通り報道』をしているのは、民主主義の破壊、亡国の道」と発言した。作家の大下英治は、田中ブームは「東大卒と官僚支配への抵抗」と分析し、私、早野は、田中番記者の経験の基に「安倍政権の冷たい政治の対極にある角栄の『情の政治』に国民は憧れを抱いている」と指摘した。

⑩田中角栄の運命を決めたロッキード汚職を知るには、朝日新聞記者の奥山俊宏著「秘密解除 ロッキード事件」を読むことを勧める。公文書を丹念に読み解いた中から、真相が浮かび上がってくる。

塾生五訓

【学びの姿勢】

一、塾生は、自ら学び、互いに意見を交わし、活発に議論に参加する。

【運営への参画】

一、塾生は、塾生一人ひとりが塾を創り上げていくことを自覚し、塾の運営に積極的に参画する。

【塾生の交流】

一、塾生は、真剣にありながらも、笑いの絶えない塾づくりをめざす。

一、塾生は、年齢、性別、職業、国籍、その他の社会的立場にかかわらず、一塾生として対等平等に、学び交流する。

【学びの還元】

一、塾生は、塾で学び得たものを、行動に移し、社会への貢献に努める。

世話人一覧

7月勉強会から、世話人と事務局のコラボによる、「生き方塾」を始めました。現時点の世話人は次の通りです。

<福島>

皆川猛(代表)、安斎隆子、伊東優子、佐藤歌子、原田まりこ

<東京>

千田利雄(代表)、大野一彦、狐塚裕子、鉢村健、元谷晶子

世話人から出欠の確認などの諸連絡が来る場合もありますから、どうぞご協力ください。

●今後の日程

<9月勉強会>

9月24日(土)、東京・高田馬場IZUNOME TOKYOで応援団は、ニューヨークで活躍する世界的なジャズピアニストで、ジャズ界の大御所・秋吉敏子さんです。午前中は入塾説明会を行いますので、皆様、是非いろいろな方を誘ってきて下さい。

<10月勉強会>

10月22日、二本松男女共生センター[予定]で、応援団講義は、皆様ご存知の中原儀子先生

<11月勉強会>

11月19日、東京・高田馬場IZUNOME TOKYOで応援団講義は、世界的に著名な照明デザイナーの石井幹子さんです。

